話題本『数え方の辞典』の著者は飯田朝子・商学部助教授

「算数の文章題は苦手でした」

臼は1据え、バイオリンは1挺、明太子は1腹、ではチョウは？
答えは1頭……。
『数え方の辞典』（小学館）を開くと、ついクイズの出題者気分になる。
春に出版され、すでに10万部という話題のベストセラーだ。
その著者を研究室にたずねた。
中央大学の飯田朝子・商学部助教授がその人である。

【学生記者】白田彩乃（商学部2年）

すでに8刷、10万部

3月発売、初版8000部。10日で重版がかかり、現在8版（刷り）。特殊辞書部門では異例の売れ行きである。発売まもなく朝日新聞「天声人語」（3月8日付）が取り上げたのも大きかったようだ。その後、テレビのワイドショーや週刊誌などでも紹介され、書店に行けば、「話題のベストセラー！」の看板コーナーに、本が平積みされている。いまや、子供たちから国語の教師、お年寄りまで、幅広い年齢層の「困ったときにはこの一冊」的言葉のバイブルになっているようだ。

そういえば、ナインティ・ナインのテレビ番組で「ブンブン……」の暴走族コーナーも数え方のゲーム。もしかして先生、番組の監修をされているのでは？と聞いたら、「それはないですよ。番組はときおり私もみているけれど」と気さくな言葉が返ってきた。

もしやこの子は天才!?

「ノート5冊、消しゴム1個、鉛筆4本、足したらいくつになるでしょう？」。小学校の算数の教科書に載っている文章題。普通の子なら、なんの疑問ももたずに、「10！」と自信をもって手をあげるところだが、それが少女時代の飯田先生にはどうにも不思議に思えたという。

「どうして、数え方が違うものを足すことができるの？しかも、答えを＜つ＞で聞かれているのに、なんで＜10つ＞で答えては間違いなの？」

こんなふうに考える子供はそうはいまい。もしやこの子は天才!? 当時の担任教師は後年の研究を予想しただろうか。

「ですので算数の文章題は苦手でした」と、飯田先生はうち明ける。ほほえみながら。

「1本」「1つ」「1個」…

モノの数え方の単位、助数詞の研究は1995年からだという。インターネットが発達し始めたころである。テレビ、新聞、雑誌、それにネットからサンプルを集め、パソコンに入れていく。その数、ざっと名詞が4600語、助数詞が約600語。そうすると、数え方の傾向が分かってきたという。

東京大学大学院（人文社会系研究科言語学専門分野）の博士論文（99年）は「1本」「2本」の助数詞「本」から用途を集め、どのくらい長ければ「本」で、どの程度まで短くなると「個」で表現するのかを研究した。

「本」で表す名詞で最も多いのは電車の本数の数え方だそうだ。たとえば、「京王線新宿行きの特急が1本でている」「電車1本逃した」など。また、ひとつ、ふたつ等の表現における「つ」の意味と用法も興味深い。「手段が1つある」とは言うが「手段が

1個ある」とは言わない。逆にヘルメットは1個だが、1つとは数えない。また、「つ」でも「個」でも使うことのできる名詞もある。どの程度重なっていて、どこから変わるのか、普段なにげなく私たちは同じように使っているが、言われてみれば……ナルホドと合点する。昔からの単位の由来もそうだし、意味のくくり方や用法にみられる一定のルール、暗黙のコード。そんな博士論文の研究結果をぜひ一般の人にも読んでもらいたいと、構想新たに執筆したのが『数え方の辞典』である。要した時間は、実に3年！

やわらかな表情の飯田助教授――東京大学卒。同大学院博士課程修了。専攻・言語学、英米文学。03年から現職。

出版社めぐり

「以前から、こういった本がありませんかという問い合わせは、主に小中学校の国語の先生や留学生、日本語の先生からありましたので、ニーズは少なからずあるとは思っていました。ただ、それがどの範囲まであるのかということは分かりませんでしたね」

出版までの道のりは、まさに「就職活動の学生と同じ」だったそうだ。まず、どういった本を作ればよいかのマーケティング。そして絵や図をつけて原稿を作り、プリントアウトしたものをいろいろな出版社に自分で持ちこみ、宣伝し、面接を受けた。最後は書籍を多くの人に知ってもらうための、パブリケーション活動。

「商学部の教員として、こうした一連の活動を体験できたことがよかった」と言語学の助教授は言う。「自分が身をもって体験したことを学生に教えていきたい」とも。

版元を引き受けた小学館では当初、「初版の８０００部を1年かけて売ろう」という目論みだったようだ。それが大ヒットしたのは冒頭の通りだが、本人曰く「あの本を出版できたことに意味があるし、まとめられた達成感を味わえたことがうれしい」。

謙虚そのものだが、

「でも……商学部の学生が誰一人として出版のことを言ってくれないんです。テレビに出てたね、と言われたことはあるのですが（笑）。中大生ってシャイなのかしら、それとも関心がないのかしら。シャイなのかなと善意に解釈してますけどね」

すこし表情が曇る。確かに中大生がシャイというのは前から言われていたことではあるけれど。シャイだけならまだいいけれど、と同じ学生としてちょっと胸が痛い。

「へェ～！」「へェ～！」の泉

本のコラムには、「そうだったのか！」というような話が掲載されている。チョウは一般の「匹」や「羽」とは別に「1頭」という数え方があるのは知っていたが、その由来は知らなかった。もともと「頭」はゾウやトラなど大型の動物を数える助数詞であって、昆虫のチョウとはかけ離れているように思える。カギは英語だった。英語では牛などの家畜を“head”で数え、たとえば5頭の牛を“five head of cattle”という。そしてこの用法が動物園にいる動物を数える際にも使われ始め、飼育しているすべての生物を“head”で数えるようになった。そのうち、昆虫学

者たちがチョウの個体を“head”で数えるようになり、20世紀初頭に日本語直訳の「頭」が学術論文では定着していったのだという。

読みながら私は、つい「ヘェ〜！」「ヘェ〜！」と左手で机をたたいている。

さらに、ウマはトーゼン「1頭」だが、漱石の小説では「1匹」と出てくる、とか、漱石の初期作品にはなかったトン（t）がある時期から頻出するようになるとか、文学作品を通した知識もいろいろ。〝トリビアの泉〟である。

この本を読むと、改めて日本語とは、世界的にみて数え方の表現が豊かな言語の1つだと実感する。もっともそれは比較的ということであって、地球にはもっと多様な表現の言語もあるのよ、と飯田先生に教わった。たとえば、アメリカ先住民のある部族は、動物に乗るヒト、乗り物に乗るヒト、年をとったヒト、走っているヒト……すべてのヒト数え方が違うそうだ。日本語では、ヒトはどんな人であってもヒトであるが、そこではヒトの動作も一緒に見て数え、それに対応する単語があるのだ。ものの見方、言語学でいう「分節化」の仕方によって、数の数え方まで違ってくるわけである。日本人にはお手上げでも、現地で生まれ育った人々には、何の苦労もなく自然と身についてゆく。言語の多様性、不思議な力である。

先生は「言語学」の授業でこれまたおもしろい授業を行っている。たとえば、「液晶テレビの薄さを表現する広告コピーを考えましょう」。「超薄いテレビ」「テレビの進化版！」……説明的で、ツマラナイ。そこで、

＜一枚のテレビ＞

うまい！　1台ではなく、1枚とするだけで、消費者は絵画のような薄さを頭に思い浮かべることができる。

「ことばの重要性をもっと知って、センスを磨いてほしい」と先生。他にも、「『まったり』にみる味覚語の比喩拡張」とか「『〜のほうは』は〝ぼかし〟表現か」といったおもしろそうな研究論文を発表されている。

言葉は生きている　数え方の新陳代謝

「私たちの使う数え方は、温泉のお湯と一緒です。いつも一定の水かさがあって、使わない水はこぼれ落ちてゆき、また新しい水がその分入る。数え方のリストにも常に新陳代謝があるんです」

言葉は生きている。そんな進行形の言葉状況へのビビッドな関心。ことし3月、六本木ヒルズ森タワーで回転ドアの事故があった。あの事故によって、数え方も変化したという。もともと回転ドアは「基」で数える。しかし、事故後は「台」になった。あの事故は回転ドアだったからこそ起きた、手動ドアでは絶対に起きない事故だからである。その影響で最近では、手動のドアでさえも「台」で数えるようになったそうだ。

新しい数え方も絶えず誕生している。たとえば、メールを学生たちは「1メール、2メール」と数えたりする。また、一時期流行った鳥インフルエンザは、鳥だけでなく、牛やカラスにも広がったことから、「1頭／羽の検体」ではなく「1検体」という助数詞が一般化してきた。時代や地域、環境によって言葉は風のように変化しているのだ。

手紙は「1通きたよ」と言う。では、みなさんは電子メールを、どう数えていますか？

「通」は送信者から受信者へとメッセージが〝通達〟されたことを表す。最近のメールは広告メールなどもあって「読まずに捨てる」メールもあるため、「1件」と数えるようになっている。留守番電話も、かける側の一方的なアプローチだから、機械音が教えてくれる。「3件の伝言をあずかっています」

せめて、読んでもらえる＜1通のメール＞を書きたいな。先生の話を聞きながら、そう思った。